

シンポジウム報告

本センターは、東アジア的視野の中で古代都城制を解明しようと研究を続け、そのため毎年都城制研究集会を開催して、都城に関する様々な課題をめぐってシンポジウムを行ってきました。ここでは2月に行った第9回と、遅くなりましたが昨年度の第8回の、2度の都城制研究集会の報告をします。

第9回都城制研究集会

古代都城のその後と古都へのまなざし

2015年2月11日(水・祝)

第9回都城制研究集会は2015年2月11日に、「古代都城のその後と古都へのまなざし」をテーマに行われました。

そこで取り上げたのは、都城が都城でなくなり、古都となった時代です。古都をめぐる論点には2つあります。1つは物理的に、かつての都城の地がどのように変化したのかという問題です。もう1つは、都城が後世にいかに関わり返されたのか、つまり古都へのまなざし、古都観の問題です。後世の人は荒れてしまった古都をいかに偲び、何を思ったのでしょうか。そしてさらに時間が経つと、都の跡を探し求め、新たに関係する地名を付けるといった動きもみられました。

これら2つの論点は、都城がその後の歴史に与え



中世の奈良に関する報告をする佐藤亜聖氏

た影響力とともに、都城と現代とのつながりにも光を与えることになるものです。今回のシンポジウムを「古代都城のその後と古都へのまなざし」と題した所以です。

報告者と報告内容は、下記の通りです。例年は歴史学・考古学・歴史地理学関係の報告が中心ですが、今回はテーマに即して文学関係の報告もあり、また時代も古代にとどまらず近世にまで及びました。

文書史料や和歌・地誌類、地割・地名、遺構や遺物、これらを通して上記2つの課題に迫った報告が相次ぎました。いつまでも振り返られる飛鳥、忘れられた藤原京、平城旧都に残る礎石への思い、平城京から中世都市奈良への変化、難波宮の旧地に造られた大名屋敷・武家屋敷、地名に残る恭仁京の痕跡、紫香楽宮の瓦に対する国学者たちの関心等々、それぞれの古都の様相が報告されました。そして特に近世における古都観が、深めるべき課題として浮かび上がってきたと感じられました。

文学関係の報告を加え、かつ近世にまで視野を広げることで、都城制研究集会は新たな研究の広がりを達成できたのではないかと思います。そして参加者も約200名に達しました。今回も学内外の多くの研究者・機関のお世話になりました。報告者をはじめシンポジウム開催にご尽力いただいた関係者の方々、また今回共催団体として新たに加わっていただいた奈良県立万葉文化館と大阪歴史博物館に、お礼申し上げます。

本研究集会の報告内容は、『都城制研究(10)』(2015年度刊行予定)で公開する予定です。

報告

平城京のその後—問題提起として—

館野和己(奈良女子大学)

文学に見る飛鳥のその後

井上さやか(奈良県立万葉文化館)

その後の藤原京—藤原宮京の退遷過程—

山本崇(奈良文化財研究所)

旧都の礎—平安後期和歌に見る平城京—
岡崎真紀子 (奈良女子大学)
南都焼討と宿院—奈良女子大学校内遺跡をめぐって
前川佳代 (古代学学術研究センター)
平城京から中世都市・奈良へ

佐藤亜聖 (元興寺文化財研究所)
その後の難波京 豆谷浩之 (大阪歴史博物館)
恭仁京その後 森島康雄 (京都府立山城郷土資料館)
近世における紫香楽宮観

伊藤誠之 (甲賀市歴史文化財課市史編さん室)
討論司会：村元健一 (大阪歴史博物館)
西村さとみ (奈良女子大学)

共催：奈良県立万葉文化館・大阪歴史博物館・奈良
女子大学研究推進プロジェクト「古代平城京域の空間
変化—「みやこ」から「古都」へ」研究グループ
(代表：館野和己)

(館野和己)

第8回都城制研究集会
東アジア古代都城の立地環境
2013年12月15日(日)

第8回都城制研究集会は2013年12月15日に、「東アジア古代都城の立地環境」をテーマに、海外から北京大学考古文博学院の齊東方氏、韓国国立中央博物館の李炳鎬氏を招聘し、国際シンポジウムとして行いました。

古代都城の地は、王権の本拠地として支配を実現し維持するのにふさわしい自然環境や地勢・立地の良さ、防御、交通の便宜などの実際の観点から選ばれました。したがって各都城について、これらの要素を明らかにする必要があります。しかし選地の理由はそれにとどまらず、自然環境などは解釈し直されて、思想的にも都城にふさわしい場所とされまし



今岡春樹学長の開会の挨拶

た。都城にとって、自然の立地環境とともに、思想的環境も重要な要素なのです。よく風水思想に基づいて都城の地が定められたと言われるのも、そのことに関わっています。

こうした状況を踏まえ、今回の研究集会では、日本のみならず中国・韓国の研究者を交え、さらにベトナムも検討対象に加えて、東アジア各国の都城をめぐる立地環境と思想的環境の問題、それにふさわしい都市計画や施設のあり方などを論じました。

報告者と報告内容は、下記の通りです。議論を通



報告中の齊東方北京大学教授

して、日本・中国・韓国・ベトナムの古代都城の立地環境を具体的に明らかにすることができたとともに、各国ともいわゆる四神思想・風水思想によって都城を選地したとは言えないという共通理解を得ることができました。すなわち都城は実際的な立地の良さから選ばれ、それを正当化するために思想的解釈が施されたのです。

参加者は約150名にのびりました。海外から参加いただいた齊東方・李炳鎬両氏をはじめ、翻訳・通訳を務めていただいた村元健一・井上直樹両氏、その他関係者・関係機関の方々に深く感謝いたします。また報告内容は、『都城制研究(9)』(2015年3月刊行)で公開しています。

報告

日本都城の環境と思想 館野和己(奈良女子大学)
藤原京・平城京の立地環境 出田和久(同上)
難波宮の立地環境 村元健一(大阪歴史博物館)
中国都城の立地環境

齊東方(北京大学考古文博学院)
中国三都の立地環境—建康・長安・洛陽の自然と
社会— 妹尾達彦(中央大学)
ベトナム昇龍城の立地環境

上野邦一(奈良女子大学)

韓国古代都城の立地環境—高句麗と百済を中心に—
 李炳鎬 (韓国国立中央博物館)
 コメント 新羅都城の立地環境
 山田隆文 (奈良県地域振興部)
 討論司会：積山洋 (大阪歴史博物館)
 西村さとみ (奈良女子大学)
 共催：都城制研究会 (科学研究費補助金研究「大阪
 上町台地の総合的研究—東アジア史における都市
 の誕生・成長・再生の一類型—」研究代表：脇田修)・
 科学研究費補助金研究「古代都城・都市をめぐる
 環境論」(研究代表：館野和己) 研究グループ
 (館野)

第10回若手研究者支援プログラム
 和歌と物語

2014年8月30日(土)～31日(日)

第10回若手研究者支援プログラムが2014年8月30日と31日の2日間にわたり、古代学学術研究センター主催、奈良県立万葉文化館との共催で開催されました。「和歌と物語」を大テーマとして掲げ、『萬葉集』を中心に和歌と伝説・伝承・物語等との関係について掘り下げました。のべ135名参加。

第1部 公開講演会

8月30日(土) 於・奈良県立万葉文化館 87名参加
 『松浦宮物語』と『萬葉集』

奥村和美 (奈良女子大学)

伝説の容器としての韻文—歌は語れるのか—

村田右富実 (大阪府立大学)

第2部 若手研究発表会【公開指導方式】

8月31日(日) 於・奈良女子大学 48名参加
 アメノヌゴト考—古事記における位置づけ—

加野友理 (日本女子大学・院生)

講師 尾山 慎 (奈良女子大学)



村田右富実大阪府立大学教授の講演

古事記の国譲り神話について

管 浩然 (皇學館大学・院生)

講師 谷口雅博 (國學院大學)

万葉歌の『部』の用法について

李 敬美 (大阪府立大学・院生)

講師 乾 善彦 (関西大学)

物思ひ瘦せぬ 人の児故に—巻2・一二二歌の表現

阪口由佳 (古代学学術研究センター)

講師 平館英子 (日本女子大学)

(奥村和美)

第9回若手研究者支援プログラム
 注釈と受容—『遊仙窟』を中心として—
 2013年8月24日(土)～26日(月)

第9回若手研究者支援プログラムが2013年8月24日から26日の3日間にわたり、古代学学術研究センター主催、奈良県立万葉文化館との共催で開催されました。「注釈と受容」というテーマで、中国唐代伝奇小説『遊仙窟』を中心に、中国文学及び各時代の日本語・日本文学に及ぼした影響と問題点が明らかにされました。のべ192名参加。



公開シンポジウムのような様子

第1部 日中比較文学研究フォーラム

○公開講演会

8月24日(土) 於・奈良県立万葉文化館 70名参加
 中国に於ける『遊仙窟』研究の回顧と展望

金 程宇 (南京大学文学院域外漢籍研究所)

○シンポジウム『遊仙窟』の注釈と受容

8月25日(日) 於・奈良女子大学 70名参加

中国文学—遊仙窟注— 衣川賢次 (花園大学)

国語学—訓点語— 尾山 慎 (奈良女子大学)

上代文学—萬葉集— 奥村和美 (奈良女子大学)

中古文学—源氏物語— 新聞一美 (京都女子大学)

中世文学—太平記— 森田貴之 (南山大学)

近世・近代文学—幸田露伴—

青木稔弥(神戸松蔭女子学院大学)

コメンテーター:

金程宇(南京大学文学院域外漢籍研究所)

コーディネーター: 奥村和美 (奈良女子大学)

第2部 若手比較文学研究発表会

8月26日(月) 於・奈良女子大学 52名参加

『遊仙窟』口語語彙と和訓についての考察—名詞の接辞及び重複を中心に—

張黎 (立命館大学講師)

和語「けぶり」の表現について—漢詩文の「煙」との関わりに着目して—

王秀梅 (梅花女子大学非常勤講師)

酒呑童子説話の成立について—大陸要素の取り入れを中心に—

白溪 (京都大学・院生)

源氏物語古注釈における遊仙窟

梅田千佳 (京都大学・院生)

近世期における『遊仙窟』の利用—『南総里見八犬伝』を中心に—

的場美帆(奈良女子大学研究支援推進員)

(奥村)

国際シンポジウム参加報告

第40回国際考古分析学シンポジウム

中沢 隆 (研究院自然科学系)

平成26年5月19日から23日まで、ロサンゼルス(カリフォルニア州)で第40回 International Symposium on Archaeometry (ISA) 2014が開催されました。Archaeometryは考古分析学とでも訳せばいいのでしょうか。2年に一度の国際シンポジウムで、この年はGetty Conservation Institute (GCI) とカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) が当番でした。19日に学部の講義があり、初日から参加の深草俊輔・特任助教の後を追って20日からの参加でした。GCIはJ. Paul Gettyというかつての石油王で世界一の大富豪がつくった財団の一部門です。今回のシンポジウムで、私たちはこの財団が運営するGetty美術館に収蔵されている2世紀頃の宗教画の画材を分析した結果、ウシのコラーゲンが検出できたことを発表しました。ちなみに、西洋画はウサギの膠で溶いた絵の具を使うのが普通だそうです。会場は20日の昼にホテルで少し休んでからタクシーとケーブルカーを乗り継いでよ

うやくたどり着いた山の上の太平洋が見渡せる宏大な美術館ではなく、そこから5km程離れたこれまた豪壮なGetty Villaでした。ろくにプログラムを確かめずに来たのが悪いのですが、風景だけは十分に堪能できました。

21日からの会場は、ホテルからは歩いて15分くらいのUCLAでした。大学のキャンパスまでと会場までは同じ位の道のりです。日本の桜とほぼ同じ高さで藤と見間違えるような色の花が咲く木が町中を彩っていました(写真)。帰国してから調べたら、この季節だけに咲くジャカランダ(紫雲木)という世界三大花木の一つでした。これも、予習しておくべきだったと後悔しています。



UCLAのキャンパス内に咲くジャカランダ

さて肝心のシンポジウムの内容ですが、自然科学分野ではオーラルもポスターも、蛍光X線分析、フーリエ変換赤外分光、顕微鏡観察、¹⁴C年代測定や安定同位体比の質量分析による年代推定といった、演題だけ見ると日本文化財科学会と大差はありませんでした。それでも、国際シンポジウムというだけに、研究対象はあらゆる年代と地球上のすべての地域を網羅している感がありました。私が注目していたのは21日の晩にあった歓迎夕食会直前の、Terry Brown (University of Manchester) による“biomolecular archaeology”と題した講演です。演題から、本学の“protein archaeology”の先を行く方法や成果が出るのではないかとヒヤヒヤしていましたら、主に考古学資料のDNA解析で、ヒトを含む現世生物のDNAによる汚染問題をいかに克服するかという内容だったのでほっとしました。University of Manchesterはタンパク質の質量分析で世界最高級の設備と人材を擁しているのも、依然

として要警戒です。その代わり、タンパク質の質量分析について発表したのは私たちだけでしたが、ポスターでコラーゲンのアミノ酸配列がどう考古学に役立つのか、なかなか理解してもらえなかった気がします。かといって、今の段階であまり宣伝しすぎると、研究設備や人材が充実した研究機関ならば、例え二番煎じでも私たちをあっという間に追い越すでしょう。この分野一番乗りの特権を利用して先頭を独走し、皆に追いつかれる前にその先に行く研究をしようというのが私の目論見なので、どこまで宣伝すべきか悩むところです。ハンガリーの若い研究者が「分析したい資料があるんだけど」と話しかけてきたので名刺を渡しましたが、その後連絡はありません。できればこのシンポジウムをきっかけにして面白そうなサンプルが手に入ればという期待は外れましたが、protein archaeology にまだ有力な競争相手が現れていないと確信できたことが、今回のシンポジウムで得た最大の収穫といえるでしょう。

このシンポジウムにはポスターの共同発表者である筑波大学の谷口陽子先生が出席されず、400人余りの参加登録者のうち、日本からの参加者は中沢、深草の2名だけでした。日本または日系人は、東海岸のYale大学から大陸を横断して参加したポストドクのTonoike Yukikoさんと、高速道路を何時間かかけて飛ばしてきたというUCSB (Santa Barbara 校) の大学院生 Sakai Sachiko さんの二人の女性を加えても、まだ4人でした。女性と言えば、この時はまだ in press だった“Characterization of binding media in Egyptian Romano portraits using enzyme-linked immunoadsorbent assay and mass spectrometry”と題する「タンパク質考古学」事業の成果として出た最初の英文論文 (*e-Preservation Science*, 2014, 11. 76-83) の筆頭著者の Joy Mazurek (GCI) も、共著の谷口先生も女性です。奈良女子大学はこの分野にもっと女性研究者を供給できそうな気がします。

シンポジウムの受付で、最初にプログラムと各種のパフレットが入った布袋をもらいます。その中に色の違う二枚の紙が入っていて、何かと思うと次の開催地を決める投票用紙でした。一回目の投票でOxfordとAthensが残り、イギリス・マニアの私は、二回目は迷わずOxfordに投票しました。開票結果はシンポジウムの最後に発表されますが、2年後の開催地を知ることなくロサンゼルス国際空港に急ぎました。もう一つ気になっていた藤色の花の

名前を空港までのタクシーの運転手に訊ねたら、質問の仕方が悪かったのか「知らんけど、あんな花のどこが珍しいんだい」と問い返されてしまいました。後で「ジャカランダ」を知ってから、日本で春に桜を見て「あれは何？」と聞く観光客がいたら、何て間抜けなやつだと思われるだろうと、妙に納得しました。花の名前ぐらいなら実害はありませんが、専門の化学を「内」とすれば「外」にあたる考古学の研究でも、私はこんなことをやらかしているかもしれませぬ。それを自覚したのも今回の出張の収穫の一つです。

研究会報告

研究会「古代のみやこを考える」

2014年7月16日(水)

古代都城と聖徳太子—小墾田宮・斑鳩宮・斑鳩寺—

鈴木明子 (古代学学術研究センター協力研究員)

小墾田宮と斑鳩宮・斑鳩寺の造営、冠位十二階と十七条憲法の制定は非常に近い時期に行われました。また、斑鳩宮と斑鳩寺は計画的に一对で配置されており、宮寺を一对で配置するその思想は、小墾田宮と飛鳥寺の対の関係にも通じ、後の王宮と寺の造営にも受け継がれていきます。

報告者はこうした事実に変更して着目し、とくに十七条憲法の思想が小墾田宮や斑鳩宮・斑鳩寺の造営の思想といかに関連するののかという視点から、憲法の中心的なテーマである衆議の思想・推古朝における群臣会議の変化(衆議の成立)と小墾田宮の構造との関係・衆議の前提となる群臣の遵法を支える仏教信仰の具体的な内容(寺院の造営意識)とは何かという問題を検討しました。

十七条憲法の制定と宮・寺の造営を貫く思想の構造的把握をめざすという新たな視点の提示により、文字化された思想と個々の政策の関係など、方法論にもおよぶ議論が活発に繰り広げられました。

(鈴木明子・西村さとみ)

研究会「正倉院文書研究の新たな試み」

2014年11月8日(土)

本センターにおいては正倉院文書研究の新たな試みとして、国語学と歴史学の共同研究によって正倉院文書の解明に取り組んできました。この研究会では、従来の正倉院文書研究にはなかった新たな視点から、国語学と歴史学の研究成果の一端を紹介しま

した。

正倉院文書の『運』と『漕』

桑原祐子（奈良学園大学・古代学学術研究センター協力研究員）

文字を書くことが仕事であった古代の下級官人たちは、本来の漢語用法から逸脱しながらも、実務の現場にふさわしい漢字の使い方をしています。しかし、それは、彼らが漢語本来の用法を認識していなかった結果ではありません。漢字の持つ機能を十分に理解したうえでの様々な工夫がそこにはあったと考えられます。報告者は、そのような実態の一端を「運」と「漕」という言葉を通して明らかにし、日本的な漢字用法が生み出される背景を考えました。

現代では「漕」は「コグ」とよまれますが、古代では水運による移動「ハコブ」を表していました。そこで、正倉院文書中の「運」と「漕」に着目し、その運用実態を調査し、加えて、漢字熟語「運漕」について、正倉院文書や延喜式には独自の用法があることを明らかにしました。

『啓』の由来と性格—正倉院文書の書状を通じて—

黒田洋子（古代学学術研究センター協力研究員）

正倉院文書の中には公式令の規定になかったり、あるいは逸脱しているように見えたりと、十分に解明されていない文章様式が見られます。「啓」という文章様式もその一つです。正倉院文書の書状にみえる「啓」の性格から「啓」本来の由来や性格を明らかにし、日本に受容された経緯について考えました。本報告では「啓」と関係の深い「表」に焦点をあて、『続日本紀』の「表」の例について検討し、両者の本質を明らかにしました。

報告後、国語学・中国語学・歴史学、中国からの留学生からの質疑や貴重な意見が出されました。桑原の報告に対しては、中国語学の立場から、日中の音の違いに気を付けなければならないこと、黒田の報告に対しては興膳宏氏の研究を参照すべきことなど、二人の報告者にとっても収穫の多い研究会となりました。

なお、桑原報告は科学研究費補助金研究「正倉院文書による日本語表記成立過程の解明」（研究代表：桑原祐子）の終了報告、黒田報告は同「書状文化の源流を求めて」（研究代表：黒田洋子）の中間報告です。

（桑原祐子・黒田洋子）

古代学学術研究センター 月例研究会

本センターに参加している様々な学術分野の研究者が相互の研究内容を理解し、学際的研究を推進する基盤を作るために、月例研究会を開催しています。2014年度に開催した月例研究会は以下の通りです。

6月4日（水）大賀克彦（センター特任講師）

「威信財からみた古墳成立期」

7月2日（水）深草俊輔（センター特任助教）

「文化財資料に含まれるたんぱく質を対象とした質量分析の新たな展開」

8月6日（水）阪口由佳（センター協力研究員）

「古事記中巻における神と天皇」

10月8日（水）樽井由紀（センター協力研究員）

「温泉と信仰」

11月12日（水）

川本 耕三（センター特任教授・元興寺文化財研究所）

「文化財の保存処理について」

12月18日（木）久岡明穂（センター協力研究員）

『椿説弓張月』の「虬の珠」と『日本書紀』の「潮満瓊」「潮涸瓊」

講演会報告

講演会「写経所文書中の異分子」

2014年4月21日（月）

栄原永遠男氏（大阪市立大学名誉教授）

現在の正倉院文書研究を牽引しておられる栄原永遠男氏をお呼びし、「写経所文書中の異分子」と題する講演をお願いしました。

正倉院文書中の多くを占める写経所文書は、写経所の事務局にあった文書です。ところがその中には



質問に答えられる栄原氏

他組織の文書も含まれています。造石山寺所関係文書が特に有名ですが、その他にも官僚機構から見て異なる系統の文書、すなわち異分子が入り込んでいます。ご報告では、異分子である東塔所文書・随求壇所文書・吉祥悔過所文書などを取り上げ、上馬養という人物が写経所と「所」の事務官を兼任していることから、写経所文書の裏に別組織の文書を書くなどということが起こり、両者の文書が区別されながらも、彼を介して一体化しているという状況を指摘されました。

参加者は28名。多くの文書を読み解くことから得られた最先端の正倉院文書研究に触れることができた研究会でした。(館野)

スタッフ紹介

2014年7月に特任教授の内藤栄氏(奈良国立博物館)、植田直見氏(元興寺文化財研究所)両氏が5年の任期を終え、退任されました。後任として、お二人の特任教授を迎えました。また、埋蔵文化財調査室の担当として新たに4月に特任講師1名が着任しました。

特任教授 いわた しげき 岩田 茂樹 (奈良国立博物館)



高校卒業までは阪神間で育ち、大学入学で京都へ、就職は大阪、後に奈良。生粋の関西人です。ただし両親は四国の出で、親戚も四国に多いので、自分のルーツも四国にあると感じています。中学生のときに初めて見た薬師寺金堂の薬師三尊像にシビれ、仏像の魅力のトリコとなりました。大学・大学院で美術史を専攻し、修士論文こそ仏画で書きましたが、就職後は一貫して仏像彫刻の歴史を勉強しています。博物館の展覧会などを通じて作品に肉薄し、近距離に接して初めて知りうる発見を得、そこから問題を広げる、というパターンの論文が多いように思います。その意味ではあくまで現場主義が自らのポリシーといえそうです。日本で仏像が初めて造られた飛鳥時代以降、近現代にいたるまで、どの時代においても魅力ある作品は存在します。これからも作品との出会いを大事にし、作品が語りかけてくれる声に耳を傾けてゆきたいと考えています。

特任教授 かわもと こうぞう 川本 耕三 (元興寺文化財研究所)

私は文化財の保存や研究を行なう公益財団法人元興寺文化財研究所に勤務しています。

ひとくちに文化財といっても、土中に埋蔵され土木工事などにより掘り出された出土品や寺社の収蔵庫や民家の土蔵などに代々伝えられた伝世品、鉄や銅などでできた金属製品や紙・木材・繊維などでできた製品(と、その複合物)、また、時代も劣化の程度も様々な資料があり、それらの材質や劣化状態によって保存・修理方法が異なります。

これまでは、主として出土品の保存処理の実務や処理法の研究、出土品・伝世品の分析・調査などを行ってきました。最近では、成分分析や劣化調査、保管・収蔵環境調査などを業務とする傍ら、出土土器の凍結乾燥による保存処理法の改良について研究しています。



特任講師 おおが かつひこ 大賀 克彦

本年度より、古代学学術研究センターの特任講師として着任いたしました。この場をお借りしまして、ご挨拶させていただきます。

私の専門は考古学です。テーマは、モノの流通と社会システムの変化の間の因果関係です。フィールドとしては、弥生時代から古墳時代の日本列島を中心に研究しています。この時期の日本列島は、「国家」と呼ばれる明確な中心一周辺構造を備えた社会システムが形成される直前にあたり、その前提となる様々な社会的変化が生起していたと考えられています。一方で、「墳丘墓」や「古墳」と呼ばれる極めて過大な規模を持ち、膨大な労力と資源を浪費して築造された墳墓の存在によっても特徴付けられます。また、この時期には墳墓へ副葬されることを最終的な目的とする様々な財の生産や、遠距離交易による獲得も活発に行われます。以上のような事象を、正しく時間軸上に配列して、その因果関係を検討していくことになります。

もちろん、考古資料は膨大で、しかも今も続々と



新しい資料が追加されていますので、すべての問題について自身で研究することは困難です。なので、二つの問題について重点的に研究を行っております。一つは、社会構造が反映された墳墓の築造パターンです。ここでは、列島全域に適用可能で、信頼性のある時期区分の作成が重要な課題です。それに基づいて、個々の墳墓の時期比定を行い、地域ごとのパターンを作成します（図1）。



図1 古墳の築造パターン

もう一つは、様々な財の中でも、特に玉類の流通関係を明らかにするという作業です。玉類は、時代や地域を問わず普遍的に出現する考古遺物でありながら、形状が単純なため、伝統的な手法ではアプローチが困難で研究が遅れた資料でした。そこで、玉類の材質に注目し、理化学的な分析手法を取り入れながら、流通関係を復元するという方法を採用しています。ガラス製の玉類には地中海世界から運ばれてきたものも存在することが判ってきております（図2）。

研究成果を総括するまでには、まだまだ必要な作業が残されておりますが、せっきくの機会を有効に活用して、研究を進めていきたいと考えております。色々とお迷惑をお掛けすることもあると思っておりますが、宜しく御指導賜りますようお願い申し上げます。

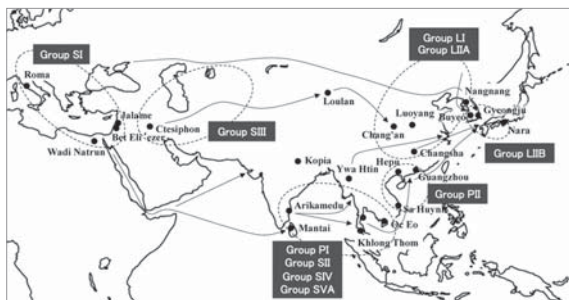


図2 ガラスの流通関係

学際的共同研究体制に基づく

タンパク質考古学創成事業との連携

「学際的共同研究体制に基づくタンパク質考古学創成事業」主催、当センター共催でシンポジウムを開催しました。

・西アジア発掘と関連科学（2015年3月28日（土）於・奈良女子大学）

刊行物案内

本センターの研究論集『古代学 第7号』および『都城制研究 (9)』が、2015年3月に刊行されました。

古代学 7

「古墳時代前期のナトロンガラス」大賀克彦・田村朋美／「奈良時代における木材の調達と加工—遺跡出土イスノキ材と正倉院文書にみられる「由志木」—」木沢直子／「奈良女子大学ミュージアムの文化財保存環境におけるカビ汚染の制御」鈴木孝仁・中島明日香・徳山直宜／「中臣宅守の表現意識—「思ふ」と「恋ふ」—」中川明日佳／『歌枕名寄』の継承と変遷—対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵本をめぐって—」樋口百合子／「「安世房中歌」訳注」西川ゆみ・横山きのみ・谷口洋／「千歳松関係書状資料—「古梅園造墨資料」翻刻と解題（8）—」的場美帆／「魚鰾膠に関する新資料—「古梅園造墨資料」翻刻と解題（9）—」六車美保

都城制研究 (8)

「日本都城の環境と思想」館野和己／「難波宮の立地環境」村元健一／「中国都城の立地環境—長安から洛陽へ—」齊東方、翻訳：村元健一／「中国三都の立地環境—建康・長安・洛陽の自然と社会—」妹尾達彦／「ハノイ昇龍（タンロン）城の立地環境」上野邦一／「韓国古代都城の立地環境—高句麗と百濟を中心に—」李炳鎬、翻訳：井上直樹／「新羅都城の立地環境」山田隆文／「宮から京への展開と藤原京・平城京の立地環境」出田和久

奈良女子大学古代学学術研究センター

Newsletter No. 7

2015年3月31日発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205 号室

TEL/FAX : 0742-20-3779

URL : <http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html>

e-mail : kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp

編集：館野和己・宮崎良美